

新しい富士講像の構築に向けて

大高康正

一般に「富士講」と言えば、長谷川角行を教義上の開祖とした江戸時代以降に関東地方を中心に流行した角行に連なる系統の講集団を思い浮かべるだろうが、ここでいう富士講とはではない、修験道に由来する富士山信仰の講集団を指している。例えば現在も三重県内は、富士山への信仰を拠り所とする富士講を伝えている地区が数多い。三重県内の富士講は、現在は修験道との繋がりをもっていないのであるが、行事の際の唱え言や伝来資料を辿っていくことで、かつて修験道との繋がりがあったことを明確に示している。

江戸時代に流行した関東の富士講は、近代以降に教派神道化していくが、こうした富士講とは異なる西国地方で流行していた富士講は、関東の富士講が流行する以前から存在した古い富士講の姿である。富士講全体の形成史を明らかにする上で、現在も富士講の事例が多く残る伊勢・志摩地域、また滋賀県甲賀地域等をフィールドにして、修験道に由来する富士講の実態を明らかにすることは重要である。その成果を積み重ね、各地域の富士講のモデルケースを提示していくことで、従来の理解を越える新しい富士講像を構築することが可能になるだろう。

報告者は研究者との共同研究として、西国地方における富士講の故地、あるいは現在も信仰が残る地区から、これまで伊勢市東豊浜町の土路地区、鳥羽市答志島、鳥羽市神島、鳥羽市浦村町の今浦地区、志摩市阿児町の志島地区、志摩市浜島町の南張地区などで現地調査を実施し、今年度は鳥羽市浦村町の「海の博物館」所蔵資料の調査も行った。

三重県内の富士講は、近代以降は交通網の発達により、富士登山の際の経路が多様化するが、基本的には江戸時代以前は表口（大宮・村山口登山道）を利用した。その理由も表口を管轄していた村山修験（富士山興法寺、現在の村山浅間神社）の修験者が、三重県内に檀那場（活動拠点）をもっていたことが影響している。また三重県内で講を伝えていた、あるいは伝えている地区では、村内、山中、山頂、海岸付近など様々な場所に「浅間さん」などと呼ぶ信仰拠点を必ず設置している。この拠点で祀られている「浅間さん」がほぼ大日如来であることも、修験道との繋がりを強く示している。

伊勢・志摩地域には他にも100ヶ所以上の富士講の存在する、あるいは存在していた事例が抽出できる。例えば、伊勢市の土路地区のように現在もまだ富士講の活動が維持されている地区も、鳥羽市の今浦地区のように、富士講の活動は行われなくなったが、かつて地区に居住した富士先達为中心となって富士講を行っていた地区もある。各地区に居住した富士先達は、村山修験が任命していたのであるが、伊勢・志摩地域の富士講には富士先達の存在が確認できない地区も数多くある。今後は、富士先達の居住する地区の富士講の講運営、富士先達の居住しない地区の富士講の講運営と富士登山の方法とに、どういった相違点があるかについて課題としていきたい。